

埼玉県大会を終えて

熊谷に着いて、まず目に飛び込んだものはその災害の惨状であった。2月の関東を襲った大雪は、許容量をはるかに超える重みでドームに押し掛かった。3か月经つが、復旧のめどはついていないという。

しらこぼと・越谷を襲った竜巻もそうだが、天災の恐ろしさをまざまざと感じずにはいられなかった。人間の構築物など即日に消し飛ばされるのだ。



★ハンマーの天野、800m小野瀬が活躍

春高はまずハンマーの天野が順当に3位。自己記録を49mと更新した。

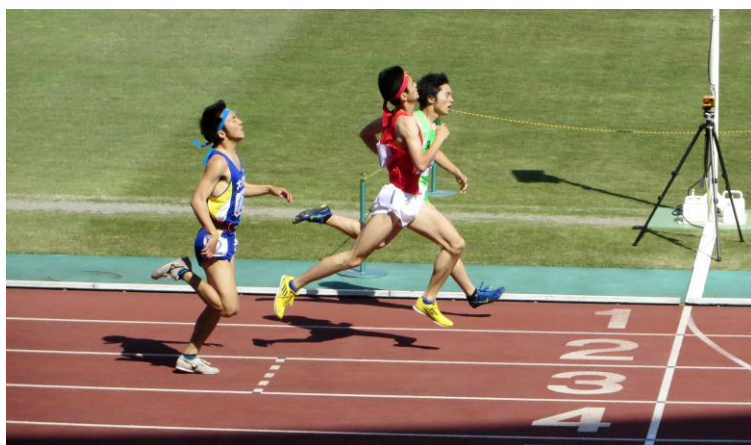
今のハンマーは6Kg。14ポンド(6.3Kg)時代の春高記録が清水の59m。インターハイ出場の葛西や南川が54m近く投げているので、300g軽い現在はそれ以上の成績を関東では求められるであろう。

競歩の藤田も23分26秒56で6位入賞。



800mでは東部を制した小野瀬が大活躍であった。

予選1分58秒28、準決勝1分56秒11、決勝も1分57秒08と安定した記録で無事に関東への切符をつかんだ。



しかしそこは埼玉県大会。決勝レースの様子を聞くと、入賞目的でラストを流している選手もいたという。800mにおける関東6位への戦いは極めて厳しいのは必定。記録ランクや県の順位はあまりあてにならないであろう。ゆさぶりをものもしないレース巧者のみが生き残れる格闘技だ。

また、現春高記録保持者の入山が記

録狙いのレースで達成したように、小野瀬や加藤には1分54秒の記録更新も期待したい。その力は十分にあるだろう。

★5000mは県大会でも春高新 14分57秒に！



22年ぶりに青木選手によって更新された春高5000m記録。
県大会でもその力は発揮された。



今年の県大会5000mは、タイム決勝ではなく、予選レースが行われることとなった。そのため、青木のいる予選1組はみな様子を伺い、セーブしてまったく前に出ない膠着状態。1週83秒という忍耐のレースが始まった。3000mを過ぎて待ちきれない選手が仕掛けてきた。青木も8位以内を数えながらついていく。15分46秒の6位で通過。この超スローペースの1組が、次の2組に大きく影響した。プラス枠を巡っての争いは当然ペースアップにつながった。

2組を走る近藤は、15分50秒で12着。しかしプラスにうまく滑り込んだ。プラス枠は1組のスローペースが災いし、ほとんどが2組から拾われる形となったのだ。春高は2人とも決勝進出を果たした。(右写真)



青木選手は1500m7位、5000m7位と入賞。14分57秒34の春高記録・自己記録をマークしての立派な7位であった。関東は逃したが、埼玉県の6位は、やはり14分50秒前後を問われるのは仕方ないであろう。前記録保持者の福田も「2年生としては立派な結果。どんどん狙って行ってほしい」と語る。



★「埼玉」の壁の厚さ

県大会全体の模様は、竹村義人審判長から解説していただいた。

最近の埼玉県内は、竜巻や疾風など強風が吹きすさぶ特徴が強い。今回もまさに「風踊る大会」であったという。短距離は組によってはプラスマイナス4m近い風速差が生じ、プラス枠も大きく運に左右された。風で失速をおそれた中長距離レースは着順狙いに集中し、好記録は阻まれた。風が舞う跳躍も幅跳び三段跳びでは踏切合わせに難儀したようだ。したがって本来の力を発揮するのは関東大会以降と予測される。



そんな中でも男子400mは圧巻であったという。

仕事場での審判長。重責を果たす厳格な態度で競技会に尽力する。

ウォルシュ ジュリアン（東野）選手が47秒51の大会新記録で優勝したのだ。

東部地区を大会新の48秒3で制した金子選手（昌平）が勝つと予測していたが（今大会2位48秒5）、それを大きくしのいだ。これまでの大会記録は、今やオールジャパン1600mRメンバーにも選出された山崎選手（当時 埼玉栄）の47秒66。山崎選手はインターハイ400m連覇もしているクラスなので、このジュリアン選手にも俄然注目が集まるであろう。ちなみに昨年は県大会に出場すらしていなかった。200mもジュリアン選手1位、金子選手2位。向かい風2mのなか21秒63と21秒79をマークしたこの二人は、インターハイでも十分に決勝を狙うであろう。

ちなみに東部地区8種混成で5401点の県高校新記録をマークした高瀬選手（昌平）は100mのみで棄権している。故障であろう。同じ東部地区として全国制覇者が出る喜びがなくなったことは非常に残念である。未来ある選手の再起を願う。

よって優勝は4700点台。県大会記録(GR)である5146点 菅沼 拓郎(埼玉・春日部)2013は、しっかり名を残した。



仕事後の審判長。試合結果を教えていただいた。

春高の400mR、マイルも準決勝に進出。毎年見せる大塚監督のリレー術は見事である。

東部で100m、200m、400m、入賞なしの布陣から、県大会で準決勝に進めるテクニックはさすがである。選手やチームの心情としても「予選落ち」と「準決勝進出」はまるで違うであろう。

さすがに埼玉県大会のリレー。マイルの準決勝通過は3分20秒台だし、決勝では5チームが3分19秒以内で走る。高校生の人口そのものの減少継続、競技離れが危惧される昨今であるが、このように頑張っている県内の選手を見るとホッとす。同時に県大会というものは高校生にとって特別な試合である事を思い返さずにはいられないものであった。